

シェアハウスに住んでいたけど、同居人とのトラブルが多かったので引越を決意した。

しかし、十九歳フリーターの私にとって東京の家賃は高すぎる。なので不動産屋さんに頼み込んで格安物件を紹介してもらった結果、「でる」と噂の事故物件に住むことになった。

「本当に幽霊っているのかなあ」

荷解きがひと段落した後、私は部屋をぐるりと見渡した。間取りは1Kの、よくある单身者向けのマンションだ。

キッチンが廊下であり、居住スペースとは扉で区切られている。ベランダもあり、四階なので洗濯物を外に干しても大丈夫そう。

築十二年で風呂トイレ別エアコン付き。独立洗面台、南向き、コンロも二口あり。最寄駅の山手線まで徒歩十分。

これで家賃は管理費込み二万円だ。破格も破格だろう。

「死体の跡とかも残っていないし、部屋も綺麗で文句なしなのに」

今時の白いフローリングを見ながら、私は部屋のドアを見た。

どうやら前の住人はあの扉のドアノブで首を括って自殺したらしい。勤め先のパワハラが理由とのことだが、命を絶つ前に「夜中に男が話しかけてくる」「一人暮らしなのに部屋で視線を感じる」と友人に相談していたのだ。

元々この部屋はその手の噂で住人がいつかないのに、自殺者が出たのをきっかけにSNSでバズってしまい、マンション全

体の評判が悪くなってしまったのだ。

不動産屋さんが言うには、部屋は空き部屋にするより利益が見込めなくても人を住まわせた方がいいらしい。空室期間が長いと物件の資産価値が下がるだとかなんとか。

あと、事故物件は一度人を住まわせたら、次回以降は告知義務が無くなるからだとも。多分、私がすぐに引越すと思われるっているんだろうな。幽霊を怖がって。むしろ幽霊に感謝しているぐらいなのに。

万札を盗まれたり朝昼夜関係無く通話で騒がれたりする環境と比べれば、事故物件の方が全然マシだ。少なくともお金は盗まれないし、日中は静かだもんね。

しかも元の家賃が九万円だったのを鑑みれば、幽霊が実質家

賃七万円を負担してくれている状態だ。人間とのルームシェアより幽霊とのルームシェアの方が快適でしようと考えても。お化け様々だ。

「あ、もうこんな時間じゃん。シャワー浴びて寝るかあ……」

時間が気になったのでスマホを見れば、日付が変わる直前だった。明日もバイトがある。引越し直後で疲れているけど、時給制なので働かないとその分稼ぎが減るから休めない。

さっさと寝よう。明日も早いものだから。

私は化粧ポーチから試供品のシャンプー等を取り出して、浴室に向かった。

「……？」

ふと、背中に視線を感じたので振り返る。当然だが後ろには

誰もおらず、服が入った段ボール二箱と折り畳み机、新しく購入したベッドが部屋に置いてあった。

なるほど、これが例の――。

「幽霊さんかな？　こんばんわ。これからよろしくね」

虚空に向かって話しかけるも、返ってきたのは静寂だけだ。

私は特に気にすることなく、そのまま扉を開けて部屋を後にした。

私が東京で暮らすようになったのは、高校を卒業してすぐのことだった。

卒業旅行で東京へ遊びに行っている間、地元が土砂崩れの被害にあつたのだ。

その際、実家が崩壊し、親戚もろとも両親が他界。あつという間に天涯孤独になってしまった私は、安い賃金で働かせられる地元に残る理由もなく、少ない遺産と共に上京してきた。

今はコールセンターのバイトをして食いつないでいる。ちゃんと正社員で就職しないとなあ、とぼんやり考えながらバイト先に向かう。

時給が良いという理由でコールセンターを選んだが、税金や

物価の高さを鑑みると生活は楽ではない。だけど食事すらありつけないほどでないし、何なら多少は貯金できる。家賃代が大幅に削減されたこともあって、積極的に就活する気には起きなかった。

そうして今日も代わり映えのない一日を過ごし、家に帰宅した。

「はあー……、疲れた」

後ろ手で玄関の鍵を閉めながら、靴を脱ぐ。食事は用意するのが面倒だからスーパールの半額弁当だ。湯船を沸かすのもお金と時間かかるし、今日もシャワーで済ませよう。

廊下と部屋の電気をつけて、トートバッグを床に置く。スマホを充電しようとした時、また背後から視線を感じた。

後ろを振り返るも、あるのはソファも兼ねたベッドだけだ。ベッドの上にいるのかな？ やだなあ、私少し潔癖症だからお風呂入ってない人に布団潜られるの無理なんだよね。まあ死んでいる人に文句言っても仕方ないし、幽霊が清潔であることを願うしかないか……。

ため息を吐いて、タオルを持って浴室に向かう。一応幽霊も気を使えるのか、シャワー中には視線を感じなかった。代わりに、温めた弁当を食べている間はずっと背後から強い視線を感じた。

特に気にしても仕方がないのでスマホを弄りながら普段通り過ごしていたら、そろそろ寝る時間となった。電気を消して布団に潜ったあと、スマホのアラームを設定する。明日は遅番だか



らいつもより長く寝られるのだ。スマホを頭上のベッドフレームに置いて、私は目を閉じた。

——意識が浮上したのは、寝始めて少し経った頃だった。

「んん……？」

身体に違和感を覚えて、目を覚ます。起きてしまったが、まだ時間は夜のはずだ。二度寝しようと横向きになろうとして、はたと気が付く。

寝返りが打てない。

それどころか、指一本すら動かせない。

まるでベッドに縫い留められているように、身体が固まっている。金縛り、という怪奇現象が頭によぎった。

にわかに鼓動が速くなる。私は仰向けの状態のまま、唯一自

由な目を動かして周囲を見渡した。

「……っ！」

真っ暗な部屋の中、私の横に佇んでいる人間がいた。

髪が長く、黒い着物を着ている幽霊だった。長身で、おそろく骨格から男。幽霊は長髪をだらんと顔に垂れさせながら、私を見下ろしていた。

黒髪の隙間から、目が覗いている。真っ黒で、光が宿っていない目は、見ているこちらをとてつもなく不安にさせた。

うわぁー……確かに、これは怖い。

お化けが平気な私でもドキドキするのだから、苦手な人は無理だろう。あと夜中に起こされるのが連日続いたら睡眠不足になる。明日は遅番だからいいんだけどさ。できれば週一ぐらい

で勘弁してほしいな……。

私を見下ろしている幽霊にそう念を送ろうと睨めば、彼の手が腹を摩っているのが目に入った。

……そう言えば、晩ご飯中が一番視線が強かった。もしかして、お腹空いているのかな……？

ひもじい思いをしているのが本当であれば、何だか幽霊が可哀想に思えてきて、私はつい言ってしまった。

「あ、あした……」

金縛り中でも声は出せるんだ、とどこか他人事のように考えながら幽霊に伝える。

「おにぎり、作っておくから……食べていいよ」

「……」

幽霊から返事は無い。ただ代わりに、彼の瞼がぴくりとわずかに動いた気がした。

直後、強烈な眠気が私を襲った。緊張状態から一転、心地よいまどろみに抗えるはずがなく、私は呆気なく意識を失った。

スマホのアラームで目が覚めた。止めない限り延々に繰り返すそれをタップし、ベッドから起き上がる。

……現実味ないなあ。昨日のあれ。

怪奇現象にあったにも関わらず、私には実感が湧かなかった。まるで変な夢を見た感覚だ。

だけど、約束は約束。幽霊がいるのは事実だし、約束を破って恨まれたら困る。まあ用意したおにぎりを食べなかったら、私が食べればいいだけだ。

私は軽く身支度を済ませた後、近所のスーパーで無洗米と調味料、卵などの食材を買った。急いで帰宅して米を炊飯器にセットし、ついでに朝ご飯としてチーズオムレツも作る。

スーパーで一緒に買ってきた食パンに乗つけて、朝食の完成だ。

スマホで動画を見ながら朝ご飯を済まし、歯磨きをしてメイクをする。ちょうど化粧が終わった後に、炊飯器が米の炊き上がりを教えてくれた。

手を洗って、調味料と薬味を用意してからおにぎりを作り始めた。米は内釜に入れたまま、天かすと青ネギ、塩昆布とめんつゆを目分量入れて混ぜる。私も夜に食べるから、四つは作れるように米を分けて、おにぎりを握っていく。

出来たおにぎりは粗熱を取るため皿に置いて、空になった内釜と蓋を洗って片付けて……としていたら、いつの間にかバイトまでの猶予は無くなっていた。

まだおにぎりは温かったが、常温で放置すると痛むかもしれないので、ラップをして冷蔵庫にしまった。

「おにぎり冷蔵庫にあるから。私も食べるから、二つ以上食べないでね！」

トートバッグを手に持ち、部屋を出る前に声をかける。

相変わらず視線を感じるだけで返事は無かったが、これ以上ゆっくりしていると遅刻するので私はバイトへ向かった。

帰宅後、冷蔵庫の中を確認すると、皿からおにぎりが二つ減っていた。

「おお……！」

やっぱりお腹が減っていたんだという気持ちと共に、幽霊が

冷蔵庫を開けられることにシニールさを覚える。

まあ食べてくれたならそれで良しとしよう。手洗いを済ませてから、おにぎりを電子レンジで温めて私も食べる。温めたからか天かすの食感が柔らかくなったがこれはこれで美味しい。コンビニで買ってきたサラダチキンと一緒に食しながら、おにぎりを食べ終える。

「ごちそうさまでした。ねえねえ、おにぎりの味付け大丈夫だ——ぴやあっ!？」

今日も背後から視線を感じたので、味の感想を聞いてみる。返事に期待しないで振り返ってみたら、幽霊が姿を現していて私は変な声を上げた。

幽霊は、私の斜め後ろでベッドを背もたれにするように体育



座りをしている。膝を抱え、長い黒髪を床に付けながら、光の無い目で私を見つめていた。

「そ、そこに居たんだ……声かけてくれればいいのに……」

「――」

「えっ？ 何？ ごめん、もう一回言って」

幽霊はわずかに口を動かし、私に向かつて喋っていたが、声が小さいのか聞き取れなかった。もう一度尋ねれば、幽霊は自分の顔の横で指で輪っかを作った。「○」のジェスチャーに、私は彼の意図を汲み取る。

「えっと、味付け大丈夫だったってことかな？ 美味しかった？ 良かったらまた明日作るけど」

「――」

黒髪から覗く幽霊の顔がパツと明るくなり、何度も小さく頷く。先ほどより上機嫌そうな彼は、相変わらず生気の無い顔でどこか嬉しそうに微笑んでいた。

……良く見ればイケメンだなこの人。

昨夜は暗くて気付かなかったが、幽霊はとても整った顔立ちをしていた。目鼻立ちがハッキリしていてかつ顔が小さい。幽霊なのになんか髪もツヤツヤしていて綺麗だし、この人生前は芸能人だったかもしれない。

家賃が安くなった上にイケメンとルームシェアなんてお得だなあ。幽霊だけど。まあ彼氏じゃない観賞用の男に生死は関係ないか。しつかり拜んでおこう。

何となく手を合わせて幽霊の綺麗な顔を堪能していると、彼

はバツと勢いよく顔を上げた。しばらく驚いた様子で私を凝視していたが、やがてふつと笑って姿を消していった。

な、何だったんだろう、今の……。

幽霊の急な行動に私は困惑するも、明日もバイトがあるので風呂に入ることにした。シャワー後、部屋に戻るも幽霊の気配はなく、そのまま寝る時間となったので私はベッドへ入った。

「最悪……晴れだつて言つてたじゃん……」

翌日、バイトから帰つてきた私はびしょびしょに濡れていた。

天気予報が大外れし、夕方から激しい雨が降ってきたのだ。

傘を持っておらず、かといつて止む気配も無い中突っ切つてきたせいで、靴下までぐしょぐしょだ。雨水を吸い込んだ服を玄関で脱いで、タオルで髪を拭こうと洗面所に向かったとき気が付いた。

——そう言えば今朝、おにぎり作るついでに溜まった洗濯物を洗つてベランダに干したんだつた。

サアツと顔が青くなる。上の階が屋根代わりになるとはいえ、横向きの雨なら関係ない。また洗い直しか……と徒労感を覚え

ながら部屋に入れば、畳まれている洗濯物が机の上に置かれていた。

「えっ？」

目を疑って、机に近付く。背の低いその上に、衣料店のようにキッチリと服やタオルが折り畳まれている。窓を見れば、ベランダに干していたはずの洗濯物が無くなっていた。

「えっ、えっ？」と困惑していると背後から視線を感じた。振り返れば、昨日のように幽霊が姿を現し、また指で丸を作っている。私はようやく理解した。

「あ、あなたを取り込んでくれたの……？」

「――」

幽霊はにこりと微笑んだあと、スーッと消えていった。私は

感動した。あの人がすごく良い人だ……！

イケメンの上にこんな手伝いまでしてくれるなんて、なんて親切なのだろう。ありがたやありがたや、と手を合わせて拝んでから、私は乾いたタオルを手にとってシャワーを浴びに行った。

それから、幽霊との奇妙な生活が始まった。

私が二、三日の頻度でおにぎりを作っているからか、大体彼も同じ頻度で家事の手伝いをしてくれた。

洗濯機や掃除機のゴミを取ってゴミ箱へ入れてくれたり、シヤンプーや洗剤が無くなりそうになったら詰め替えてくれるなど、痒い所に手が届くお返しをしてくれるのだ。すごく家庭的。

ゴミの日にゴミを分別して纏めてくれた幽霊に、死んだお母さんの影を重ねてちよつと悲しくなってしまうた。

ともあれ、私はそんなありがたい生活を送っていたが、ほんの少しだけ不便があった。

最近、眠りが浅いのだ。

幽霊の影響か、毎晩変な夢を見る。起きたらすっかり忘れてしまうので、どんな内容かはわからないが、とにかく夢見が悪い。

そして今夜もまた、その変な夢を見てしまっていた。

「んう……♡」

ぴちやぴちやと水音が頭に響く。

口の中で何かが蠢いている。息苦しいのに、身体が動かせな

い。どうにか目ぐらいは開けられないかと抵抗していると、舌をぎゅう♡と引っ張られた。おそらく指で強めに摘ままれ、びくん♡と肩が跳ね上がる。

そうしている間も、口内は冷たい物で隅々まで探られていた。まるで生き物のようにぐにゅぐにゅ♡と動くそれは、他人の舌を連想させる。

でも、それはあり得ない。

だって、今もまだ私の舌は誰かの指で口の外に引っ張られている。そんな状態で、私にキスをするのは物理的に無理だ。できたとしても相当無理な体勢になるから、こんな風に深く口付けするなんてできるはずがない。

だからこれは夢なんだ。



最近私を悩ませている変な夢。今みたいにキスしながら舌を指で摘ままれたり、顎を擦られたり。現実では不可能な愛撫をされる。そんな夢。

「ふっ……っ……っ♡♡♡」

口内を指と舌で同時に弄ばれて、頭がくらくらとする。下腹部がだんだん重くなっていく。内腿を擦り合わせようとしても身体が動かないのでどうすることもできず、せめてもの慰めとして爪先を丸めたり、背中を弓なりにして熱を逃す。

そんなわずかな抵抗すら、私を責めている人物は気に食わなかったのだろう。それが私の口から舌を引き抜くと、今度は服に手を掛けてきた。

「……あ」

パジャマが捲られ、肌が外気に晒される。そのまま下着も剥ぎ取られて胸が露わになった。ひやりと冷たい手が乳房に這わせられる。私の口を責めていたのと同じ手だ。見えてもいないのに、なぜかそう確信した。

「ひんっ！？♡♡」

ぢゅるっ♡と水音と共に右の乳首を吸われ、思わず引き攣った声を出した。キスとは違う性感帯を直接弄られる感覚に、太腿がぶるりと震える。舌先でぴん♡と乳首を弾かれれば、ぞくぞく♡と背中が疼いた。

腹がさらにずくっ♡と重くなる。ただでさえキスで焦らされて溜まらないのに、それは舌だけでは終わらせなかった。

「んおっ！？♡♡」

かりかりっ♡と、指で乳首も弾いてきたのだ。舌が動く、合わせるように乳頭を爪でほじられる。滑った舌尖と乾いた指先の感覚が同時に襲ってきて、頭と身体が困惑した。

「おっ！♡♡ それ、らめ……っ♡♡ ぐ、おっ♡♡♡♡」

体験したことのない快感に、ひっきりなしに声が漏れる。触れられていない左の乳首がむくむく♡と主張し、勝手に疼き始めた。それを慰めるよう、人物の手がよしよしと乳輪を撫でてくる。

「お、お……♡♡」

ピンピンっ♡♡ ピンピンピンっ♡

カリカリ、カリカリ♡

——ぎゅうう……♡

「お~~~~~……!っ♡♡♡」

頃合いだと思われたのか、指と歯で右の乳首を挟まれ、そのまま弱く引っ張られる。痛いのに気持ちよくて、バチバチと頭の奥で何かが弾けた。

びくびく♡と打ち上げられた魚のように下半身が痙攣する。蜜壺からどろり♡と愛液が零れ、ショーツに垂れていく。

いったの……? もしかして、胸だけで……?

乳首だけの刺激で絶頂して困惑していると、全身がふっと軽くなった。

金縛りも解け、先ほどまで動けなかったのが嘘のように身体が自由になる。

そして同時に、急激に眠気が襲ってきた。私を責め立ててき

た人物が誰なのか今日も不明のまま、私は意識を手放してしま  
った。

目を覚ませば、いつも通りの朝である。

身体が妙に怠い。またあの変な夢を見たのだろう。どんな内容なのか、起きたらいつも忘れちゃうけど。

五分だけベッドの上でSNSをチェックして、ようやくバイトの支度を始める。今日もまた昨日と同じ一日の始まりだ。

顔を洗って着替えて、おにぎりを作ったあと朝ご飯食べて、化粧をして。戸締りを確認してバイトに行って、夜くたくたになって帰ってくる。

ここ一年繰り返された毎日だが、今日はちよつとだけ変化があった。幽霊が部屋の隅で姿を現していたのだ。

「あ、洗濯物取り込んでくれたの？ 今日もありがとうね、助

かるわー」

「――」

「うーん、相変わらず何言っているのか聞き取れないや」

乾いた洗濯物を取り込んで畳んでくれた幽霊に礼をするも、彼の声は聞こえてこない。口を動かしているのは見えるから、喋ってはいるんだろうけど、不思議なことに言葉は全く伝わってこないのだ。

「まあ不便じゃないし、いつか。ねえねえ、どうせなら愚痴聞いてよ。今日も大学生がバックレやがってさあ……」

買ってきた総菜を温めながら幽霊に愚痴る。上京してから、私は人に飢えていた。東京に友達がいなかったため、常に会話不足なのだ。バイト先で仲の良い人はいるけど、結局プライベート

で遊びにいけるほどでもないし。軽い愚痴程度なら、この幽霊の存在はうってつけだった。

「誰が空いた穴を埋めると思っているんだろうね。ほんと大学生嫌い。フリーターって言ったら見下してくるし。もう採用するのやめてほしい」

温めた半額コロッケとおにぎりを一緒に食べる。味には期待していなかったが、ふにやふにやした衣が意外と美味しかった。中のほくほくしたじゃがいもも相まって、ちよつとだけ機嫌を直す。

「……将来を考えていないのは、正論だけどね。はあ……でもやりたいこととか無いしなあ。ねえ、あなたは——」  
幽霊に話を振ろうとした時、彼の名前を知らないことに気が



付いた。それどころか、彼の正体すら私は知らない。丁度良い機会だから、思い切つて尋ねてみる。

「あなた、名前何て言うの？　そもそも、あなたって何者だったの？」

私の疑問に、今まで黙って愚痴を聞いていた幽霊がゆっくり顔を上げた。わずかに口が開きかけたが、すぐさま唇を噛み、首を横に振る。

「名前、無いの？　じゃあ、生きていた時の記憶とかは？」

「――」

幽霊は曖昧に笑った。寂しそうな顔が私の疑問の答えだった。空腹といい、この人の境遇はあまり良いものではないらしい。ちゃんとお礼をしてくれる優しい人なのに。私はおにぎりの時

と同じように、つい勢いからまた言ってしまった。

「じゃあさ、名前付けてもいいかな？ あった方が便利だし。嫌なら止めるけど……」

「――！」

幽霊はパッと顔を明るくし、こくこくと頷いた。期待に満ちた目で見つめられ、私は思わず保険を掛けた。

「い、一応言っておくけど、私ネーミングセンス無いから……そんなカッコイイ名前とか期待しないで……」

「――、――」

「ちょ、ちよつと、急かさないでよ」

部屋の隅にいた幽霊が私に急接近し、目の前で正座で待機し始めた。無言で名づけを促され、私は苦し紛れに候補を出す。

「えっと、えっと、じゃあ……レイはどう？　幽霊の『レイ』から取ったんだけど」

我ながら適当過ぎるネーミングに呆れつつも、彼は満足したようだ。にこりと笑顔になって、私の手を握った。嬉しそうな表情に私も釣られて笑顔になった直後、彼の口が開かれた。

「うれしい。ありがとう」

「……えっ？」

聞き覚えの無い、低い男性の声。

目の前から発せられたそれが信じられず聞き返すも、幽霊――レイは満面の笑みを浮かべたまま、姿を消した。

「き、聞き間違いかなあ……？」

呆気に取りられた私は、先程まで掴まれていた手をだらりと垂らした。その後、食事や風呂を終えても、レイが現れることはなかった。

相変わらず、変な夢は続いている。

昨日と違うのは、水音に混じって低い男の声が聞こえてくることだ。

「うれしい……うれしい……名前、うれしい……」

上のパジャマはとくに剥ぎ取られて、素肌はそれの前に曝け出されていた。湿った吐息がかかるも、冷氣のようにひんやりとしており、体温を感じられなかった。

「かわいい、かわいいねえ……ふふ、ふふふっ」

楽しそうな笑い声がやけに頭に響く。耳を塞ぎたいのに、手が動かない。私に覆い被さっている人物——おそらく男に、べたべたと身体を撫で回される。

首筋に、胸に、脇に、腰を。私の肌を好き勝手堪能した後、するり♡と内腿に手が入り込んだ。できた。

「ん、うづ……♡」

流石に抵抗しようとするも叶わず、わずかに腰を浮かせただけだ。そうしている間に男の手が私のズボンに手を掛け、ショーツごと足首へずり下ろした。

「っ、ひっ♡」

下半身が外気に晒された感覚に、ぶるり♡と身震いする。中

途半端に引つかかっていたズボンとショーツを取られ、両脚を広げて持ち上げられた。足の間を男に見せつける格好に、かあ……と顔が熱くなり、無意識に首を横に振っていた。

「い、いや……っ！ あ……？」

すると突然、急に眠気が引いていき、身体も動かせるようになった。おそろるおそろる目を開けば、暗い部屋の中、私の足を持ち上げている男を見ることができた。

長髪で、黒い着物で、私を見る目はとても暗く沈んでいて、光が宿っていない。見知っている男の顔に、私は彼の名を呼んだ。

「え……っ？　なんで、レイが……？」

レイは私の膝裏を持ちながら、楽しそうに言った。

「夢だよ。これは、夢」

「……夢？」

「そう、夢。今宵のことは、全部夢、だよ。かわいい、かわいい、人の子」

レイの声を聞いていると、何だか頭がぼうつとして、すごく落ち着いてく。

……そっか、夢かあ。そうだね、幽霊に性欲があるはずないし。

やだなあ、こんな夢見るなんて。ストレスでも溜まっているのかなあ……。

レイの言葉に納得して、身体から力が抜けていく。もう金縛りのような拘束感は無いけれど、抵抗しようという気力も無く

なった。ベッドへ身を預ける私を見て、レイはゆっくりと口角を上げた。

「イイ子、イイ子。身体、楽にしている、ね」

レイは私の足を肩にかけ、秘部に顔を近づけた。

「あっ！♡」

指で割れ目を開かれたかと思えば、突然陰核に息を吹きかけられた。ふうー♡と、優しい冷気が敏感なクリトリス全体を撫でる。強すぎる刺激に、腰がびくびく♡と震える。だが、責めはそれだけでは終わらず、レイは私に見せつけるように舌を出した。

「あ……レ、レイ……？」

「きもちよく、してあげるから、ね」